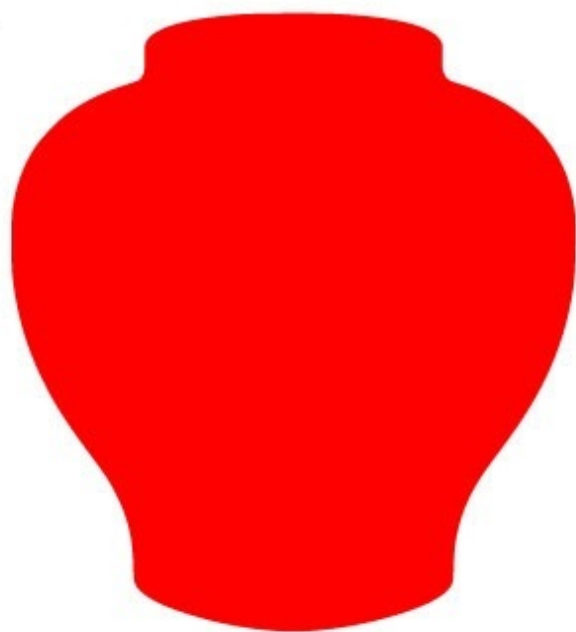


赤い壺
種田山頭火



藍岩堂



赤い壺



藍岩堂



赤い壺

一

赤い壺 二

自分の道を歩む人に墮落はない。彼にとっては、天国に昇ろうとまた地獄に落ちようとそれは何でもない事である、道中に於ける夫々それぞれの宿割に過ぎない。

優秀な作品の多くは苦痛から生れる。私は未だ舞踏の芸術を解し得ない。私は所謂、法悦なるものを喋々する作家の心事を疑う。此意味に於て、現在の私は『凄く光る詩』のみを渴望している。

涙が涸れてしまわなければ、少くとも涙が頬を流れないようにならなければ、孤独の尊厳は解らない。

ほんとうに苦しみつつある人は、救われるとか救われたいとかいうことを考えない。そういう外的な事を考えるような余裕がないのである。

空には星が瞬たいている。前には海が波打っている。曙を待つ私の心は暗い。この暗さの中で私の思想は芽吹きつつある。私は悩ましい胸を抑えて吐息を洩らしている。その吐息の一つ一つが私の作品である。

夜は長いであろう。しかし夜はいかに長くても遂には明けるであろう。明けざるをえないであろう。闇の寂しさ恐ろしさに堪えて自己を育てつつある人の前には、きっと曙が現われて来る。

同情したからとて涙を流す勿れ、同感だといって手を拍つ勿れ。心と心とのつながりは屢々、涙を流したり拍手したりすることのために破られた。

二羽の雀が一銭であるとして嘆く勿れ。それは死んだ雀の価である。生きた雀は自由に大空を翔けりつつあるではないか。

傷づけられて——傷づけられることによって生きてゆくものがある。

自己の醜劣に堪え得なくなつて、そして初めて自己の眞実を見出し得るようになる。

義人は苦しむ。偉大なる義人とは深刻なる苦痛を嘗めて来た人である。

正しきものは苦しまざるを得ない。正しきものは、苦しめば苦しむほど正しくなる。苦痛は思想を深め生活を強くする。苦痛は生を浄化する。

真面目な人と真面目な人とが接したところにのみ生の火花が閃めく。彼等は友となるか、然らざれば敵となる、敵とならなければ友とならざるを得ないからである。

日本人ほど自然を眺める国民はない。そして日本人ほど自然を知らない国民はない。

日本人ほど小児を可愛がる国民はない。そして日本人ほど小児の心を理解しない国民はない。

赤い壺 三

物を弄ぶのはその物の真髓を知らないからである。理解は時として離反を^{もた}齎らすけれど、断じて玩弄というような軽浮なものを招かない。

鏡を持たない人は幸福である。その人は自分が最も美しいと信じきっている。私はそういう見すばらしい幸福を観るにも堪えない。

自己を愛するということは自己に^{おも}倭ねることではない、自己に寛大であることではない。真に自己を愛するものは、自己に対して最も峻厳であり残酷でさえある。

自分の罪を許すことの出来ない人は他の罪を許すことも出来ない。他の罪を責める人は、より多くの自分の罪を責める人でなければならないと同じ道理である。

生存は悲痛なる事実である。その悲痛なる事実であることを理解することによって、そしてその悲痛なる事実の奥底まで沈潜することによってのみ堪え得られる事実である。

妻があり子があり、友があり、財があり、恋があり酒があつて、尚お寂しいのは自分というものを持っていないからである。

張りきった心、しかも落ちついた心でありたい。何物をも拒まない、何物にも動かされない心でありたい。

蒔いた人は刈れ、蒔いた人のみ刈れ。蒔いた人の強さよ、刈る人の尊さよ。

自然に対して倭ねるなかれ。

自己を掘る人の前にはたった一つの道しかない。狭い険しい、ともすれば寂しさに泣かるる道しかない。

叱られて泣いた昨日があつた。殴られて腹も立たない今日である。——悔なき明日が来なければならぬ。

外部の圧迫は内部の破綻を緊密にする。そこに人間性の痛切な一面がある。

死を恐れないのではない、死よりも恐ろしいものがあるからである。

肉を虐げることによって霊を慰める人のはかなさは！

霊肉合致とは霊が肉を征服することでなくして肉が霊のあらわれとなることである。

彼が墮落の悲しさよ、彼は真摯なるが故に墮落したのである。

骨肉のなつかしさ、骨肉のあさましさ。

犠牲という言葉のためにはあまりに多くの犠牲が払われた。



赤い壺

平成二十三年三月二日 初版

著者

種田 山頭火

発行所

藍岩堂